20世紀ヨーロッパ、芸術家コロニーの源泉を辿る旅

新見隆
武蔵野美術大学
芸術文化学科教授

五感で世界を捉える魅力、人間を包む自然、宇宙への回帰。
かつての芸術家たちのダイナミックな活動に探る
“五感のユートピア”。

二期リゾートの文化顧問も務められている新見隆先生は、最初にテーマである"芸術家コロニー"と「山のシューレ」のコンセプト"五感のユートピア"との関係性からお話しになりました。

「まず"五感"について。初日のレクチャーで伊東豊雄先生が"視覚偏重の近代"の弊害について触れていらっしゃいました。19 世紀末から 20 世紀の芸術家コロニーの芸術家たちは、視覚だけでなく、触覚、味覚、嗅覚などを統合して感覚を広げながら、新しい芸術形態や運動体をつくることを求めていました。また"ユートピア"とは、日本語でいうと桃源郷、理想郷です。そうした実際にはない"ここであって、ここでない"ものを求める、つまり、人間本来の楽園思考というか、理想郷への想いを実現しようとしていたのです」

19 世紀後半から 20 世紀初めの当時のヨーロッパは、芸術家コロニーの芸術家たちにとっては、「規範や因習にがんじがらめ」と、感じられていたようです。19 世紀後半になって強まってきた、科学技術が発達すれば人間は幸せになれるという考え方は、じつは人間を幸福にしないのではないかという疑問が露になってきた時代でもあります。そして、世紀末思想が台頭してきます。

「芸術家たちはこれに呼応して、アポロ＝光の神を信仰していたギリシャ以来の合理主義に対して、闇の神様＝ディオニソス的世界に惹かれてゆきます。光に明快に照らされる、視覚偏重という価値観や世界観よりも、五感で世界を捉える魅力への傾倒です。感覚が重視されて、理性が揺らいだり、わけがわからなかったりするけれども、その謎のほうが、より面白い、より深い、より豊かであることと感じるようになりました」。これがさらに、実践的な活動へとつながっていきます。「ギリシャを含めた原始的なものに帰る、原始回帰。さまざまに抑圧されている人間の身体、肉体を見直そうという肉体回帰。それから、その人間を包む自然、宇宙への回帰。つまり、自分の肉体を自然界や宇宙に重ね合わせることが、芸術のなかでの実践的な問いになっていったのです」。

新見先生は会場中にたくさんの資料を張り巡らして、ヨーロッパ各地に誕生した芸術家コロニーの系譜をダイナミックに紹介してゆきます。そのライブ感はお伝えできませんが、こんなトピックスが連打されてゆきました。「まずはイギリス。ウィリアムス・モリスらの"アーツ&クラフト運動"は、住宅の総合芸術化を目指したという面から芸術家コロニーの範疇に入れてもよいでしょう。次のブルームズベリー・グループは、チャールストン地区に小説家ヴァージニア・ウルフやその姉のヴァネッサ・ベルらが共同生活して、オメガワークショップなどの活動を続けていました。そのずっと西に位置するセント・アイヴスには、1920 年頃移住したバーナード・リーチと濱田庄司などが日本の登り窯をつくり、東西の陶芸の融合を目指したスリップウェアという技法を開拓しています」。

「次にヨーロッパ大陸へいきます。ロシアでは日本にも影響を与えたトルストイ主義者たちの芸術家コロニーが有名ですね。また、ロシアバレーは活動の中心がパリだったが、ニジンスキーをはじめ、ストランヴィンスキー、コクトー、マラルメなど一流の芸術家が参加し、独創性に溢れる総合芸術バレエをつくりあげました。

一方、ドイツではヴォルプスヴェーデに日本の『白樺』で紹介された画家ハインリッヒ・フォーゲラー、若くして夭折した画家パウラ・モーダーソン＝ベッカーなどが共同生活をしていました。また、スイスのドルナッハで活躍した総合思想家ルドルフ・シュタイナーは、科学実証主義ではなくて、人間の五感を広げて高次元で人間の知覚や感覚が深まるという、新しい精神世界を切り開いたのではないかと解釈をされていました。マーティン・グリーンの研究によると、同じスイスのアスコーナでは、1860 年頃からマジョーレ湖畔にあるモンテ・ヴェリタ(真実の山)に"自然回帰"を目指し、多くの芸術家が住み始めたり、森林浴などの自然療法を行うサナトリウムが建設されたりして、一躍ヨーロッパで有名になります。また、ドイツ表現舞踏のラーバンが舞踏学校をつくり、弟子のメアリー・ヴィグマンも参加し、舞踏の分野では大きな位置を占めていました」。

「さて、最後はバウハウスです。今回の最初の講演のラマン・シュレンマーさんのお話も思い出してください。この学校は 1919 年から 1933 年までの短い間ですが、美術学校と工芸学校を統合しながら、デザインの造型基礎教育を行い、芸術と機械生産、建築とデザインの融合を目指していました。たんに授業するだけでなく、祝祭的な雰囲気もあったようで、このことがバウハウスを機能一辺倒の生産工房としてではなく"芸術共同体"として価値づける重要な視点でもあるのです」。

新見先生は最後にこう結ばれます。「芸術家コロニーの芸術家たちが目指していたものは、たんに都市からの逃避ではありません。生そのものが断片化されようとしたなかで、五感を核として、十二分に広げ、様々な芸術を総合化することによって、人間性を回復し、再生しようとした。しかも西洋流ではなく、東洋的な統合性をもっていました。彼らが追究しようとしていた理想は現在でも生きて、私たちのこれからの生き方に大きな示唆を与えてくれます」。